

中西弘樹<sup>1</sup>: 千葉県におけるハマボウ (アオイ科) の渡来とうつろ舟の漂着  
 Hiroki NAKANISHI<sup>1</sup>: Tradition on the introduction of *Hibiscus hamabo* Siebold et  
 Zucc. (Malvaceae) to Chiba Prefecture, central Japan

ハマボウはアオイ科の落葉低木で、関東地方南部以西の本州、四国、九州、奄美大島までと韓国済州島に分布し、河口付近や、内湾、入江の岸、海跡湖岸などの塩湿地に生育する(中西 1979; Nakanishi 1985; 大場 1989 など)。筆者は全国のハマボウの分布や生育状況について調べてきた。千葉県の分布については古い文献(千葉県生物学会 1958)には載っているが、最近の文献(千葉県生物学会 1975)には触れられておらず、千葉県のレッドデータブック(千葉県環境部自然保護課 1999)には絶滅としても扱っていない。そこで、千葉市の植物研究家小滝一夫氏に調べてもらい、情報を得ることができた。

房総半島は黒潮の影響で冬でも暖かく、首都圏に出荷する花卉の一大生産地となっている。特に千葉県安房郡和田町では大正時代から花卉栽培が行われ、和田町花園地区は花卉栽培の発祥の地として知られ、今でもカーネーション、ナノハナ、キンセンカなど10種以上の花卉の生産地となっている。その花園地区には花卉栽培が盛んになった原因ともいえるハマボウの渡来についての伝説があることを小滝氏から教えていただいた。小滝氏の情報を参考に『和田町史』(和田町史編さん室 1994)を調べた結果、その伝説は明治時代に書かれた「子の神由来記」という掛け軸に記されていることがわかった。その伝説は一本の花木の枝をたずさえた姫がうつろ舟によって漂着し、そのことが原因で花卉栽培が盛んになったというもので、日本海沿岸各地に聞かれるうつろ舟漂着伝説や、マレピト信仰にもつながる興味深い伝説であるので、ここにその内容を紹介したい。

#### 子の神由来記

和田町花園地区に伝わる「子の神由来記」が書かれた掛け軸は、明治35年に書かれたもので、それ以前から伝わる伝説を図と共に記録したものである。その図は色付きで、小舟に乗った姫君の絵が描かれている(図1)。その姫君が抱えている黄色の花を咲かせた一枝の木は鮮明には描かれていないが、葉の形や粉白色をした葉の裏から、明らかにハマボウであることがわかる。以下、掛け軸に書かれた原文を示す。

「子の神権現口碑によれば、太古本村は西条村と言ひ、村名改称の原因は、人皇九十五代の帝花園院御諱は富仁の御宇に当り、如何なる人の姫君に渡らせ給いけん、うつろ舟の舟に乗りまいらせ、本村下浦に漂着す。農民集い来り、彼のうつろ舟引き上げて見るに、其齡十九、二十とも思しき官女、御身に綸子の服を召され、縫模様の打掛けを装ひ、こころわたりは人住む浦に侍るや、我は遠く大洋を漂流し、必死を凌ぎ、漸く此の浦に漂着し、汝等の世話になり、難苦を免れたり。依って不還の世にあるも此村人民の船難を冥々中に防がん、仰せと共に息絶えたり。里人これを丁寧に葬祭を営む。爾来其冥保たるや、漁民数多あれども未だ難風の際溺死するものなしと言ひ伝う。姫君の死後若干の日を経て、旅装の士老人姫君の御跡慕い来たり、彼の墓前に詣でて、嗟歎して止まず、里人これを訝り問う、旅客答へて、僕は京都の者にて、小柴某なるが主君の姫君の罪を蒙て、うつろ舟にて、おさすらひありし故御跡慕い来たりし甲斐もなく、黄泉の客とならせ給ふと、塚の上には、常に姫君の秘蔵し給う、花の木を植え且暮墓前に阿伽の水を手向け、姫の苦



図1. 子の神由来記が記された掛け軸。姫が抱えているのは花をつけたハマボウの枝。

提を引い此地に止まり、小柴の後孫同郡仁我浦村に旧名内蔵の助と今に存するに云い侍ふ。姫君の墓前に植たる花の木を、花園の花の木と名づけて、此村にのみ成木し、延慶の頃より西条村を罷名して、花園村と号すと言う。又此子の神の隣地に、花の枝、木花の地名あり、天保晩年迄に当村海岸の並木に、此花の木繁茂せしが、当時の潮風にて絶え、僅に残るを村民庭前に植え秘蔵す。又此花の木古昔より隣村へ植付培養するも、更に成木せずと云う。」

以上が掛け軸に書かれてある内容であるが、要約すると、今からおよそ700年前の花園天皇の時代に、一人の姫がうつろ舟に乗ってこの地に漂着した。村人の介護もむなしく、姫は死に、村人によって葬られた。それ以後、その漁民は海での遭難がなくなったという。その墓に彼女が大切に持って来た一本の花木を植えた。それがハマボウであり、村人達はそれを花園の花の木と名づけて庭に植えて伝えてきた。また、その地区の名称も「花園」と改められた。このように庭先にハマボウを植えたのが、花づくりのはじまりと言われ、花園地区では今でもハマボウのことを「花園の花」とよび、村社である諏訪神社の境内や(図2)古い民家の庭先には、ハマボウが栽培されているのを見ることができる。

#### うつろ舟の漂着伝説

漂着した人がたずさえてきた植物が、栽培の起源となっている話は、『日本後紀』や『類聚国史』などに記された愛知県西尾市のワタがある(中西1990;石井1999)。

一方、姫君が財宝を積んだうつろ舟に乗って漂着したという伝説は長崎県対馬には多い(永留1975)。うつろ舟とは大木をくり抜いて造った舟のことであり、うつろ舟とも言われ、対馬の南端の豆敷の高御魂神社の御神体はうつろ舟に乗って漂着したと信じられている霊石である。福井県や石川県の海岸地方にもこれらとよく似た伝説が多い(小林・高桑1973)。いずれも海のかなたから漂着してきたものが、人々に幸福をあたえる話であり、マレビト信仰に結びつくものである。しかし、上記の伝説では、有用植物とは言えない、しかもそれほど有名な植物でもないアオイ科のハマボウがもたらされたことは特異であり、きわめて興味深い。うつろ舟に乗った姫が漂着してからは、海難事故がなくなり、また結果的にはハマボウの渡来が、花づくりを始めるきっかけとなり、地元の人々に富みをもたらしたわけであるから、一連のうつろ舟漂着伝説と共通した話と言える。



図2. 村社諏訪神社の境内に植えられてあるハマボウ(小滝一夫氏撮影)。

謝 辞：伝説の存在をお教えいただき、現地を調査していただいた千葉市の小滝一夫氏、掛け軸の写真をお送りいただいた和田町教育委員会、掛け軸の文章の内容について御教示いただいた和田町の間宮強氏にお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 千葉県環境部自然保護課(編) 1999. 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物編. 435pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県生物学会 1958. 千葉県植物誌. 525pp. 千葉県生物学会, 千葉.
- 千葉県生物学会 1975. 新版千葉県植物誌. 567pp. 千葉県生物学会, 千葉.
- 石井 忠 1999. 深着物事典. 380+11pp., 海鳥社, 福岡.
- 小林忠雄・高桑守史 1973. 能登 寄り神と海の村. 28pp. 日本放送出版協会, 東京.
- 永留久恵 1975. 対馬の寄り物. 松田延夫 (編). 民俗の旅 柳田国男の世界, pp.106-107. 読売新聞社, 東京.
- 中西弘樹 1979. ハマボウ群落の分布と生態. 植物分類, 地理 30:169-179.
- Nakanishi, H. 1985. Geobotanical and ecological studies on three semi-mangrove plants in Japan. Jap. J. Ecol. 35:85-92.
- 中西弘樹 1990. 海流の贈り物 深着物の生態学. 254pp., 平凡社, 東京.
- 大場秀章 1989. アオイ科. 佐竹 輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫 (編). 日本の野生植物 木本II, pp.69-72. 平凡社, 東京.
- 和田町史編さん室 (編) 1994. 和田町史 通史編上巻. 962pp. 和田町, 和田.

---

<sup>1</sup> 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室 <sup>1</sup>Department of Education, Nagasaki University, Bunkyo-machi, Nagasaki 852-8521, Japan